Monthly Contents（月刊誌の主な特集記事）

デンタルダイヤモンド／2015. 5月号

○実践歯学ライブラリー：新たに改定された顎関節症治療ガイドライン何が、どう変わったの？
（久保田英郎・高野直久・和気裕之・澁谷智明）

＊日本人の1/4が顎関節症であるという報告もあり、自然に症状が改善するケースもあるものの、的確な初期治療により、予後が安定するケースも多い。的確な治療のためには、ガイドラインに沿った治療が必要であるが、その従来の日本のガイドラインが改定された。新たなガイドラインは国際基準のDiagnostic Criteria / TMDに整合性を持たせ、明確な診断基準を提示して標準化を担保し、医師と患者の間の病歴聴取法および診断法を詳細に記述し、研究結果の定量化や研究間の比較を可能としたものです。顎関節症の治療を行われる先生方には、是非お読みいただきたい内容です。

○Dd インプラント周囲炎セミナー：注目！インプラントのセメンタイティス
（小林 博・小川智久）

＊インプラント周囲炎のリスクファクターとして注目されているのが、セメント合着タイプアバットメントの余剰セメントの取り残し、いわゆる“セメンタイティス”です。この特集では、余剰セメント除去に適したスケーラーの形状やセメンタイティスの治療法、セメンタイティスを防ぐアバットメント形状について、記載しています。是非、ご一読ください。

歯界展望／2015. 5月号

○成功に導くエンドのイニシャルトリートメント②根管治療の前準備
～事前説明、ラバーダム、消毒、隔壁製作～（牛窪俊博）

＊岡山県歯科医師会でも講師にお迎えしたことのあるエンドの専門医ともいえる、牛窪先生の連載である。自費でのエンドの治療が中心の先生の症例は、エンドのお手本ともいえる。術前の説明や治療計画をしっかりと行い、1回の治療時間も1時間から、1時間半かけている。特に今回はラバーダム防湿についてその必要性や辺縁封鎖、消毒法を、詳しく述べている。また、ラバーダムクランプがかかりにくい場合の、隔壁の作り方も写真を添付し、説明している。参考になることもおおいと思われるので、ご一読ください。

○特集／メインテナンスの有無による歯の保存効果を検証する
―３３施設１０年以上継続来院患者2,100名調査より―（伊藤公二 黒田昌彦）

＊症例写真を多く掲載し、ディスカッション形式で取り上げているので、ページをめくって写真を眺めるだけでも参考になると思う。

ザ・クインテッセンス／2015. 5月号

○なぜ患者さんは来なくなる？データでみる定期受診の中断理由（石田智洋）

＊ウェブ調査によるモニターからの回答方式で、対象者は20～60歳代以上の男女2,472名。今回の調査では、およそ半数もの人が歯科への定期受診した経験がある一方、定期受診経験者の3人に2人が定期受診を中断したことがあり、さらに中断からの再開は半数にも満たなかった。中断の理由は、時間的・金銭的が多く、再開の理由は「気になるところがでてきた」が多数であった。だが、定期受診未経験の人も、中断したままの人も、およそ8割が歯科への定期受診を「必要」と感じている。筆者は、多忙な日常生活のなかで、定期受診の「優先度」を上げるには、口腔の健康管理のモチベーションを確立・維持するための工夫や努力と患者の都合を考え、寄り添い、いつでも戻れるような間口の広い環境づくりなど、普段から患者との信頼関係を十分に構築することが重要であると結んでいる。

○地域の高齢者を歯科はどう支えていくか 5
増加する地域の高齢者を支えるための歯科の役割□地域歯科医師会の現在とこれから

＊高齢者の摂食嚥下を含めた「口腔のフレイル(虚弱)」に対する支援も今後は必要である。治療時にむせやすい、注水を溜めることができない。また以前と比べてプラークではない食渣の残存が多い、声がかすれてきた、やせてきた、口腔乾燥などがみられるようになってきた場合は評価を行い、機能の維持・向上のためのトレーニング等を指導することも必要である。今年4月の介護保険改正では「口腔・栄養管理に関わる取り組みの充実」として、自分の口から食べる楽しみを得られるよう、多職種による「食事観察(ミールラウンド)」や会議等の取り組みのプロセス、咀嚼機能力等の口腔機能を含む摂食嚥下機能を踏まえた「経口維持支援」を充実させた。生体を維持するための栄養を経管からの摂取するルートでは「味覚」を得ることはできない。今の生活から味覚がなくなった状況を想像していただき、われわれは最後までQOLの維持に貢献できることを再認識してほしい。

日本歯科評論／2015. 5月号

○特集： 暫間ミニインプラントの臨床―インプラント治療の際に患者さんのQOLを維持する
（柴原清隆 亀田行雄）

＊インプラント手術後治癒するまでの間、機能的にも審美的にも暫間補綴物が必要になる場合は少なくありません。しかし埋入したインプラントに負荷はかけられない。そういった問題から考案されたのが暫間ミニインプラントです。インプラント治療を成功に導き、なおかつ患者さんのQOLを維持するためにはどのように暫間ミニインプラントを使っていくか、症例を交えて紹介しています。また、インプラントオーバーデンチャーにも暫間ミニインプラントが応用できるとして、インプラントオーバーデンチャー第一人者の亀田行雄先生が解説しています。

○１つ上を目指す歯内療法へのアプローチ（Ⅳ）―抜髄（Initial Treatment）【臨床編】
11. 最適な根管洗浄法とは（田中利典）

＊根管洗浄というとほとんどの先生は過酸化水素水と次亜塩素酸ナトリウムが頭に浮かぶのではないでしょうか。実際10年前の日本の歯科大学・歯学部附属病院のアンケート調査において80パーセント以上の使用状況となっていたそうです。しかしこの術式、今や世界標準でみるとすでに過去のやり方とのことです。これを読んで今一度根管洗浄法を見直しませんか。